▶OfByForコラム◀

地域の地域による地域のための Something NEWS

第㉝回

パブリック・アート&・プレイス再考
――『吾輩ハ猫デアル』をヒントとして

一般社団法人 洸楓座
一般社団法人efco.jp
代表理事 佐藤 建吉

▼国際都市とは

2020年、国際都市・東京で、東京オリンピックが開催される。その近郊都市、そして日本で、いま、求められているのは「国際」という視点と対応である。2年後には国際化・国際性の側面から、その成果が問われることになる。同様に、「環境・エネルギー」も同様に対応が迫られている。

人々が融和した都市を形づくるには、コミュニケーションが求められる。外国人観光客にとって、相互理解のためには言語が最も重要な伝達・確認手段である。

今日では、ICTやAIが駆使されコンピュータによる自動翻訳ツールが開発され実用されている。人型ロボットによる対面翻訳が進化している。

しかし、最も効果的なコミュニケーションは、人間同士の「心と心」、「知と知」であることには、間違いないだろう。そうした共通した知の認識こそが、後述する国際化や国際性の根本となる。

▼『吾輩ハ猫デアル』

誰もが知る夏目漱石の『吾輩ハ猫デアル』は、書名としては珍しく、主語と述語からなる一文であることに気付く。が、多くの本では、体言止めや修飾表現した複合語の書名とし読者の関心を誘う。例えば、『牡猫ムルの人生観』のようになる。

『吾輩ハ猫デアル』では書名の通り自分は猫である（I am a cat.）と明言しているが、それには特別の形容はない。どんな猫なのだろうか？

「名前はまだない」から始まり、ページをめくると、そのオス猫の日常の暮らし向き、飼い主たる主人の人物像、多くの来客について、さらには、人間社会の文明論を語る賢い猫である。芸術や文学、さらに科学についても理解が及ぶ。

こうして、この小説では、猫が吾輩として語る一大抒情詩であるが、作者・漱石の卓見に富む視座が心地よい。なお、吾輩は、人間の飲み残しのビールに酩酊し、甕壺に落ち、安寧で太平な死を迎える結末である。

▼国際的&国際性とアート

筆者は、国際的である要件に、アートを加えたい。それは、「知による理解」を、より上質に伝えるためのツールになると考えられるからである。また、言語によらない共通理解を提供できるからであり、「パブリック・アート」の本質があると考えるからである。

この小説に、次のような場面がある。「…。昔し以太利（イタリー）の大家アンドレア・デル・サルトが言った事がある。画をかくなら何でも自然その物を写せ。天に星辰（せいしん）あり。地に露華あり。飛ぶに禽（とり）あり。走るに獣（けもの）あり。池に金魚あり。枯木（こぼく）に寒鴉（かんあ）あり。自然はこれ一幅の大活画（だいかつが）なりと。どうだ君も画らしい画をかこうと思うならちと写生をしたら。…」

これを言ったのは、客人の美学者であるが、この言葉に触発されて、吾輩の主人は、吾輩を題材にし、写生をした。後日、件の美学者が笑いながら「実は君、あれは出鱈目だよ」と頭を掻かくが、前段の美学者の発言には真実があると、筆者も同意できる。それは、「自然の風景」の観察と敬意が、無駄なく大局的に述べられているからである。

▼「吾輩は国際的である」

主語と術語の関係を、猫を国際的に置き換えてみた。この場合、吾輩は、都市でもあり、人間であるかもしれない。また、国であるかもしれない。

「国際的である」とは、「摩擦なく行動できること」であるといわれる。これにも二つのことがあり、一つは、その個人や相手の関わりで「摩擦がないこと」であり、もう一つは、個人がすうっと、「摩擦なく行動できるように、環境整備されていること」である。これが国際都市である吾輩に求められる要件である。では、「国際都市」の正体は、どんなものであろうか？

▼「吾輩は国際都市である」

このタイトルにかなうためには、先進性とともに多様性が必要である。摩擦なく行動可能な土壌がここにある。さらに深みを与えるのが、「アート」である。

公共の場に置かれているのが「パブリック・アート」である。公共空間が展示場であり、平然と存在している。国際都市では、人間同士が「知と知」による言語によらないコミュニケーションが、街のいたるところでなされるかどうかである。その突破口を創出するのが、アートである。その中でも重要な概念は、歴史性である。最も違和感のない対象が作者不詳のアノニマスなアートである。これは、匿名的なアートともいわれる。

例えば、神社や寺院など宗教的な建物や庭園は伝統的な様式を持ち、国際的にも評価の高い歴史性・文化性を維持している。ここでは普遍的な融合がみられる。これは「自然」に溶け込んで一体化している人工建築の持つ美の世界である。

国際都市としては、件の美学者が指摘したように、街そのものが自然の大活画のパブリック・アートになっていることが求められる。それは観光都市の要件でもある。

また、国際都市たる吾輩は、猫のように酩酊しても甕に落ちてはならない。また、外国人観光客も落ちることがないようにメッセージや万人共通のサインボードが存在しなければならない。同時にそれはアートに満ちている必要がある。

このように、パブリック・アートは、パブリック・プレイスを創出する起爆剤にも成り得るものである。もはや、そこに国境はない。

註：アノニマスについては、本紙での連載コラム「エネルギーの源㊱」『アノニマスという匿名的なエネルギー革命』（第54号、9面、2016年6月13日発行）を参照。

▶『吾輩ハ猫デアル』下篇初版本カバー（橋口五葉装幀）